

特集

恩師との出会い

野崎 秀太

1. はじめに

蛭川先生、長い間の教員（教授）人生、本当にお疲れ様でした。先生にはいろいろとご指導いただき、深く感謝するとともに、これからの人生が素晴らしいものでありますよう、心からお祈りいたします。今回、卒業生を代表させていただきます、先生とのエピソードや感謝の気持ちを書かせていただきます。

2. 運命

教員希望という目標をもって2000年に城西大学に入学しました。教員採用試験に向けては、独自で勉強するものであると考えていた私にとって、蛭川先生との出会いはまさに運命であると感じました。

教職での授業時に、「本気で教員を目指す学生がいたら、採用試験のためのサークルを開いているから、興味がある場合には授業後に来なさい。」この言葉で私はすぐに「この先生だ」と思い、授業後に先生の元を訪れました。しかし、そのときに返ってきた言葉は、「数学科の学生は授業が忙しいから、3年になったらまた来なさい。」その言葉を信じ、私は3年生になったとき、もう一度先生を訪ねました。そして、先生の研究室での面談。「とにかく、教員になりたいので一緒に勉強させてあげたい」と言った私を、先生は快く受け入れてくださいました。

3. 教員養成サークル

そこからの「教員養成サークル」での活動は、大学生活の中心になっていきました。毎週土曜日の午後の活動では、事前に出された課題に対して説明をしたり、討論をしたりとサークルとは名ばかりの特別講座という感覚でした。さらに驚いたことは、合宿があったことでした。勉強のために寝食を共にして、缶詰状態で採用試験の勉強に励む。しかも、現役生に交じり卒業して講師などを経験している先輩方もいる中での1泊2日の合宿は、とてつもない自信を身に付けさせてくれました。そこでは、蛭川先生が高校の簿記の授業を行ってくれて、授業の組み立て方や発問の仕方など、大学の講義中では味わえない、教職を目指す学生のまさにお手本になる授業を見させていただき、とても中身の濃い時間を過ごすことができました。

4. 感謝

そして、蛭川先生の教えの中で、一番重要視していたのは、「一生懸命学習に励んだら、その分遊びも一生懸命になり、仲間と仲良くなりなさい」というものでした。その言葉通り、毎週のサークル活動の後には、毎日のように夕食を一緒に食べ、遊びに行きました。だからこそ今でも当時の仲間との関係は続き、日本全国にいる「蛭川チルドレン」は仲良く過ごしています。

今回、蛭川先生のご退職という人生の節目に際して、卒業生の一人として文章を書かせていただ

いたことは、とても光栄なことでした。先生との
出会いがなければ、教職に就けていなかったかも
しれません。先生の存在があったからこそ、今の
私の人生はあります。最後になりますが、いつま
でも笑顔が溢れている人生を送ってください。